論文の内容の要旨

論文題目　初期コミュニケーションシステムの発達
―母子による積木遊びの分析―

氏　　名　青 山　　慶

本論文では，乳幼児が生まれてから言語を習得し始めるまでの間に周囲の養育者と行うやりとりである初期コミュニケーションが成立し発達していく過程を明らかにすることを目的として，理論的および実証的研究を行った。理論的には，J. J. Gibson に端を発する「コミュニケーション研究の生態学」への動向と，G. Gottlieb らに端を発する発達理論のシステム論的転回に依拠しつつ，母子によるやりとりのデータを用いて初期コミュニケーション発達の実証的分析と検討を行った。

第 1 章では，本論文の背景を展望することを通して初期コミュニケーション研究における課題を設定した。これまでの初期コミュニケーション研究では，情報伝達理論，有機体論，目的論によって理論的枠組みが与えられてきたことを展望し，行為としての具体的なやりとりよりも推論などのような精神的過程が重視されてきたことと，「氏-育ち」「生得-学習」「遺伝-環境」などに代表される発達の二分法的枠組みの影響の根強さを確認した。一方で，近年のコミュニケーション研究において見られる生態学への動向では，Gibson（1979）の生態学的アプローチに依拠しつつ Reed（1996）の「環境との絶え間ない調整過程としての行為論」から他者の行為が観察可能（Goffman，1963）なコミュニケーションの資源として捉え直され，「他者を環境とともに理解する」（高梨，2015）ことの重要性が主張されていることを明確化した。その結果，本論文が主題とする初期コミュニケーションの発達の分析において「環境との絶え間ない調整過程としての行為」に焦点を当てるために，改めて発達理論における二分法的枠組みについて確認し，本論文では発達の二分法を無効にする代表的な理論的試みである発達システム論を検討することとした。

第 2 章では，本論文の目的に理論的な枠組みを提供するものとして，発達理論のシステム論的展開において重要な役割を担った Gottlieb の実証的研究と理論的展開を検討した。まず Gottlieb の水鳥を用いた刷り込み現象の実証的研究を初期から順に追うことで，Gottlieb が実証研究を通してシステム論的転回へと至る過程を確認した。その上で，前成説

と対比される後成説にも前決定的立場があることを指摘し，それに対立する立場として Gottlieb が展開した蓋然的後成説が共作用性，階層性，創発性というシステム論的概念枠組みによって特徴づけられる発達理論であることを論じた。さらに，発達システム論の潮流における蓋然的後成説の独自性は，既存の発達理論における経験概念の限界を指摘し，発達システムにおける共作用の結果生じる非自明なものを含むものとして経験概念を拡張した点にあることを明確化した。その結果，「発達における遺伝的な限界は，現実的には知ることができない」という結論へと至ることを確認するとともに，蓋然的後成説を基礎として Gottlieb が提唱する進化の新たなシナリオを展望し，行動を通して環境に資源を発見するという探索の重要性を論じた。以上より，本論文では，先だってタスクが明確ではなく乳幼児と養育者が探索的にやりとりを進行させる活動として遊び場面に焦点を当て具体的に初期コミュニケーションを分析することとした。

第 3 章では研究 I として，一組の母子が生後 6 カ月から 16 カ月目までの間に特定の玩具セットを用いてやりとりを行う縦断的データから，積木遊び場面を抽出し初期コミュニケーションの発達分析を行った。分析に積木遊び場面が用いられた理由は，Fröbel の恩物に由来する積木が保育の観点から発達の初期から長らく重要な役割をもつことが認められてきたこと，壊すことなく繰り返し配置換え可能な遊離物（Gibson，1979）のもつ動物の生活にとっての普遍的な重要性，積木がコミュニケーションにおいて幼児がそれぞれの能力に応じて遊べる場を作りやすい遊具とされていることによる。予備的観察で母親によって積木が積み上げられ，子によってそれが崩されるという遊びが月を跨いで繰り返し観察されたため，「積み-崩し」を一つのイベントと定義し，このイベントと共起する母子のコミュニケーションが分析された。その結果，合計 54 回のイベントにおいて，積木に崩しをもたらす接触は，子の身体運動の軌跡が接触の前後で変化しないような「偶発型」，接触が運動の開始と終了の間の軌跡の変化として位置づけられる「完了型」，接触後に生じた新たな積木の配置に対して別の運動が開始される「接続型」として分類することができ，月齢と共にその構成が変化していくことが確認された。特に 7 カ月目に多くを占めていた「偶発型」の 8 カ月目における減少と，それに代わる「完了型」の増加は，9 カ月目以降に観察されるより複雑なやりとりを基礎付けていることが示唆された。また，「母親-平らな床-散在する遊離物」が一体となってもたらす「積み-崩し」の繰り返し可能性と結びついた予期性は，子の崩しにおける一種の「型」の成立の基盤となっており，「環境との絶え間ない調整過程としての行為」が他者理解と密接な関係があることが考察された。一方，「崩し」における子の身体と積木の接触は，母親による「積み」において既に調整されていることが示唆されたため，第 4 章では母親の「積み」に焦点を当てさらなる分析を行うこととした。

第 4 章では研究Ⅱとして，第 3 章で用いられた縦断データにさらにデータを追加し生後 6 カ月目から 24 カ月目までの縦断データを用いて分析を行った。予備的観察から，母親による子の身体の積木への接近と接触の制御として，「積み-崩し」の繰り返しにおける積み位置の調整に着目して分析を行った。その結果，母親の積み位置の調整には，積み始める際

に土台となる積木の位置を選択する「積み開始位置の選択」，繰り返しにおいて乱れた土台の位置を戻す「土台の位置復元」，それまでに用いられていた土台の位置を母親が変更する「土台の位置変更」，別の積木を土台として用いる「土台の入れ替え」が行われていることが明らかとなった。母親による調整には，生後 7 カ月目では子と積木が密着し「偶発型」の接触が生じやすい位置を探索し利用するという特徴があったが，8 カ月目以降では「偶発型」の接触を回避するよう密着位置を避けるだけではなく，徐々に子から離れまた正面から外れた位置を選択するという傾向が現れることが示唆された。以上の結果は，「積み-崩し」の繰り返しにおいて観察された母親の積み位置の調整では，崩れやすさや崩しやすさではなく，むしろ「積み-崩し」を継続させながらも子による姿勢の変更や移動などを含むよう「崩しへと至る過程」が多様化するような位置が探索されていたと考察された。

「崩しへと至る過程」は多様化する一方で，各月では特定の「崩し」が継続的に選択されることによって，その月の「積み-崩し」を特徴づけるような形式が現れることが観察された。遊びにおいて特定の「積み-崩し」の形式が現れ継続し終了する過程がどのようにして成立しているかを明らかにするために，第 5 章では研究Ⅲとして，子と積木の接触がより詳細に分析された。その結果，子と積木の接触の多様化は，接触によって容易に崩れる「積木の崩れやすさ」，崩すためには一定の強さ以上の衝撃が必要であるという「積木の崩れにくさ」，積木は簡単には変形したり消耗したりせず同じような配置が可能であるという「配置の再帰性」，重力によって押し付けられている積木は下段になるほど移動しにくいという「積木の土台の安定性」，接触の際に構成している積木を保持することができるという「接触後の保持可能性」，接触が生じない限り積木は崩れないという「接触しなければ崩れないこと」，接触位置や強さを調整することによって崩れた後の積木の形を制御することができるという「接触後の積木の残り方」という積木の行為的な意味を発見していく過程であったことが示唆された。こうした発見の過程は，先行する接触の経験を通して発見された性質に基礎づけられて進行する蓋然的な分化的過程として捉えられることが論じられ，分化的に発見される行為的な意味は分化的多義性として特徴づけられた。その上で，特定の「積み-崩し」が継続したり終了したりする過程は，母子の積木を介したやりとりで発見されてきた分化的多義性を背景としてその都度の接触が意味付けられることによって成立している可能性が考察された。

第 6 章では，これまでの結果から得られた知見を要約し総括的な議論を行った。